



自転車社会の環境改善を目指して No.67

ドイツ ボーデン湖 サイクルツーリズム先進地視察報告

ゆっくり廻ってもらう事で地域振興に繋げる

文

特定非営利活動法人 自転車活用推進研究会 会員 藤本 芳一
輪の国びわ湖推進協議会 会長

自転車活用推進研究会 事務局：
〒141-0021 東京都品川区上大崎 3-3-1 自転車総合ビル4階
TEL 090-5301-3207 FAX 03-6409-6803
URL <http://www.cyclists.jp/>



滋賀県でのサイクルツーリズム推進の参考にするため、2017年6月から7月にかけて、ドイツの視察を行いました。

ドイツで大きな書店に入り、地図のコーナーに行くと、販売されている地図のうち1、2割はサイクリング用です。ヨーロッパと言えども書店で普通にサイクリングマップが販売されているのは、ドイツ、スイス、オランダくらいです。ドイツの地図の充実度はその中でも群を抜いています。またドイツでは、自分でするスポーツとして一番人気なのはサイクリングだと言われています。これらのことからサイクルツーリズムがおそらく世界で最も進んでいるということがわかります。

今回の視察の中心に選んだのはドイツ、スイス、オーストリア国境にあるボーデン湖です。びわ湖の約8割の大きさで、ドイツ最大の湖であり、鉄道がほぼ一周取り巻いて走っているなどびわ湖との類似性が高く、高級保養地として知られ、サイクリングによる観光が非常に盛んであるなど、びわ湖にとって手本になる地域です。

ボーデン湖でサイクルツーリズムに関わる自治体や企業、市民団体等にヒアリングを行いました。

ボーデン湖のサイクリング客は宿泊客で年間のべ25万人。加えて日帰り客は40万人。一周約270kmのボーデン湖

を平均すると6日で一周しています。1日当たりの走行距離は45km。ゆっくりといろいろな所に立ち寄りながら廻り、地域にお金を落としてもらうしくみができています。

ドイツでサイクリングを楽しむ人々

ドイツ、特にボーデン湖のサイクリング客は、日本とは違い、年配の夫婦や家族連れが主流を占めています。一見、サイクリングとは無縁な雰囲気の人々が楽しんでいる姿を多く見かけます。

自転車も圧倒的に多いのはトレッキングバイクと呼ばれる日本のクロスバイクに近いものです。スポーツ自転車に荷

台を付けるなど日常生活でも使いやすくなったもので、女性用にパイプの位置が低くスカートでも乗れる、一見、日本の一般自転車とよく似たものもあります。ただし、大きな違いはその価格で、新車で買うと安くても600ユーロ(約8万円)。一般用の自転車でも十数万円するものが普通に売られており、日本なら同程度の価格のスポーツ自転車に使われているパーツが、一般向けの自転車にも当然のように使われています。

もう一つの特徴は、車種の多様性です。通常の自転車に加えて、リカンベント(寝転がった姿勢で乗る自転車。空気抵抗が少なくスピードが出る。また腰に負担が少ない)、チャイルドトレーラー(子ども乗せリアカー)、タンデム(2人



ボーデン湖岸でサイクリングを楽しむ人々

乗り自転車)など比較的普通に見かけます。これらの自転車は、日常生活で使用する自転車がそのまま使われていて、日常生活用との車種の違いはありません。

近年の傾向としてE-Bike(電動アシスト自転車)が普及していることが挙げられます。前述のトレッキングバイクにバッテリーとアシストユニットを付けたタイプが主流で、デザインもスポーティーです。年配の人が利用しているのをよく見かけ、サイクリングの自転車の2割程度を占めています。また日本よりアシストの制限がゆるく、時速20km程度で走行している時でも、E-Bikeに抜かれることがあります。

サイクリングルートの状況

ドイツでの自転車道整備の考え方は、できるだけ車と自転車の道を分離する。そして既存の専用道、車道、歩道等ができるだけ利用する。途中、多少走りにくい所があっても連続性を確保することを主眼に置き、それぞれの場所で自転車はどこを走ればいいのかを標識により明示するという事です。

どこまでが専用道なのかわかりにくい所も多いですが、ポーデン湖一周ルートでは、走ってみたいの感覚で、約4割程度が自転車歩行者専用道。車の交通量の少ない道を自転車ルートに指定したものが約4割。残り2割が車道沿いの歩道に線を引き歩行者と分離したものや車道をそのまま走る所という感じでした。

ルート作成の考え方としては、まず多少遠回りになっても車が通らない安全な道を使うこと。幹線道路沿いに作られた自転車道よりも、自然に囲まれた道を優先すること。そのためルートが複雑になりわかりにくい所も多くなっていま

す。そこは地図と標識の整備でカバーするという考え方なのでしょう。全体としてスピードを出して走るのではなく、ゆっくり景色を楽しみながら走ることに主眼が置かれています。

自転車用の標識

ヒアリング先で、「サイクリストのためにどのようなインフラ整備がなされているか?」という質問をした所、全体的に最も重視されていたのは自転車道と共に自転車用の標識でした。

ドイツでは、サイクリングロードに限らず、街中でも写真のような自転車用の標識をよく見かけます。

標識整備の考え方は、サイクリングマップでだいたいルートをつかみ、実際に走る時には標識に従うだけでいいようにということです。ただし、実際は標識も完璧ではなく、標識がなかったのか、見落としたのか、道を間違えたり、分岐点でどちらに行くべきか迷うことがよくありました。

ポーデン湖はドイツ、スイス、オーストリアにまたがりますが、国が変わっても標識の色が変わるだけで基本デザインはほぼ統一されています。

サイクリストが地域に歓迎されるために

サイクルツーリズムを進める上で、大きな課題の一つは、地域の人自らが自転車に好感を持ち、積極的にサイクリング客を歓迎してくれるにはどうすればいいかということです。びわ湖では、自転車が多く走り車の邪魔になる、集落内の



自転車用案内標識

狭い道を高速で走り抜け、住民にとって危険である等の問題が起こっています。

しかし、ドイツでは、どこで聞いても自転車に対する一般の人の理解が進み、住民とのあつれきはないとのことでした。サイクリング客が来るのが地域のためになっていることを皆が理解し、また皆が普段の生活でも自転車を使っているため自転車に対する反感はないということです。

結局、自転車に対する理解を得るためには、サイクリング客をさらに増やす、特に時間をかけて走る人達を増やすことで地域に対するメリットが目に見えるようになること。そして地域の人々に対する自転車利用促進を地道に進めることが重要です。地域の人が日常から自転車を利用していたり、サイクリングを楽しみ、自転車に好感を持っていることがサイクリング客を歓迎することに繋がり、さらにサイクリング客を増やす。また、サイクリング客が来ることで、それを見て地域で自転車に乗る人が増えるという好循環を作っていく必要があります。

PP